

動物園のおばさん記

私は、ふとしたことでこども動物園（上野動物園内）のお手伝いをする機会に恵まれました。動物と、子どもと、どちらも私の好きな相手です。思いがけなく楽しい日々をすごさせていただきました。

ここには、三歳以下の子どもにウサギとモルモットを抱かせたりさわらせたりする、小動物コーナーという場所があります。そしてもう少し大きい幼稚園・保育所の子どものためには、また別の場所と同じようにウサギとモルモットを抱いたりさわったりできるように考えられています。動物と人間のふれあいの第一歩を、なるべく

年齢の低い時に、そしてじかにふれることで……というこども動物園の遠藤

先生のひたむきな考えがうかがわれます。そしてここで動物の世話をして

いらっしゃる方々全部が、同じ考えで毎日動物と子どもたちに接していらっ

しゃるのです。私は、いつか若い先生

が、幼児教育の場は幼稚園だけではな

い、幼稚園を離れても子どもとは離れ

たくない”とおっしゃったのを思い出

しました。殊に現職期間も短く、その

上ながいこと幼児とあまり関係のない

（わが子の幼児期はあつというまにす

ぎて……）生活をつづけて来た私にと

って、久々に生き生きとしたいく日間

かでした。いつも皆さんからいただく原稿を読ませていただいて、その中から共感を感じるものを吸収して、いつの間にか自分の考えであるかのような錯覚をもつ自分に、いやけがさしていた時だけに……。

“ここは三歳以下の方は入れません”と注意書きがあるので、羨しそうに見えるお兄さんお姉さんには、かこいの外で動物を抱かせてあげます。

ある日、小学校三年ぐらいの目のくりくりした男の子がよってきました。

“モルモット抱きたい。”とききますと、うん（モジモジして）……ただ、”

私は一瞬ギクッとなりました。そして気負って“そうよ、もちろん、”といいました。彼はとたんに元気よく、

“オーイ、抱かせてくれるってさ。”

ただだつて——”と大声でいいました。四、五人の子どもたちがとんでき
て“かわいいな、かわいいな”とそれ
はそれはにぎやかなことでした。

“ちよつとおばさん、このウサギ（モ
ルモットをさして）大きくなると耳が
長くなるんですか？”

“ホラホラ、ネコの赤ちゃんよ”

“これ、ネズミですか？”

“ハムスター？”

私たちはいろいろな質問をうけて、

驚いたり、情けなくなったり……。や
はり、こういう大人を作らないために
も大切なことなのだとつくづく思い
ました。

“おばさん、その赤い服の子に抱か
せてくださいよ、早く”

“ハイ。さ、片方の手で落ちないよ

うにおしりをおさえて、片方の手で背
中をなでてね”

“ホラ、こつち、パパの方を向いて”

カチッ（シャッターの音）“さ、行き
ましょう”

まだ離れたくないような顔をした子
どもを抱いて行ってしまおうお母さん。

中にはじーつとモルモットを抱いたま
ま二十分近く立っている女の子もいま
した。そのお母さんはニコニコして待
っていらっしやいましたっけ。

幼稚園ぐらいいになると、かえってし
りごみをする子が見られます。“ぼく
は見るだけでいいんだ”と手をうしろ
手に組んで絶対に動物にさわろうとし
ない子。はなし飼いの山羊のふんを、

爪先だつてよけながら歩く子ども。ス
モックについた動物の毛を一生けん命

はらいおとしている子。“まあこんな
によごして”とお母さんに叱られるの
かしらとこちらも気を回します。

このほか、盲学校の生徒さんたちが
“ごっちはやわらかい”“あ、これはか
たいな”とウサギとモルモットを手ざ
わりで何度もたしかめる光景など、忘
れられない場面がいくつもありまし
た。でも、午後三時、そろそろ動物た
ちを小屋にかえす時間になると、グッ
タリしてくるモルモットやウサギ、も
っと広い場所でもっと自然な形で、
子どもと動物のふれあいができたなら
とおそらく遠藤先生はいつも心を痛め
ていらっしやるのだらうと、私も心痛
む思いでした。

（赤間峰子）